



学校教育目標 主体的に考えて行動するー自律・創造・尊重ー

# 加古中 TIMES

笑顔あふれる学校 KAKOGAWA

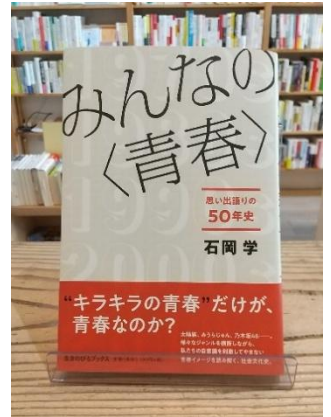
Knowledge(知識・経験からの情報)  
Action(行動・活動)  
Kindness(親切・思いやり)  
Open-minded(広い心・偏見のなさ)  
Growth(成長・発展)  
Appreciation(感謝・正しい評価)  
Wellness(心身の健康・生活のバランス)  
Answer(答えを見出す)

## 周囲にあふれる情報と自分とのギャップ…？

テレビやインターネット、SNS 等の様々な媒体から入ってくる情報は、思春期の中学生にとっては憧れの対象であり、理想の姿を映しているのかもしれませんが。

しかし、そのイメージは、時代によって移り変わっていきます。最近では変化のスピードが加速し、あふれる情報が様々な媒体を通して届けられます。その中で、他者や過去を否定したり、嘲笑したりする傾向もあると感じます。それゆえに、自分の日常と比較してしまい、ギャップを強く感じるのかもしれませんが。

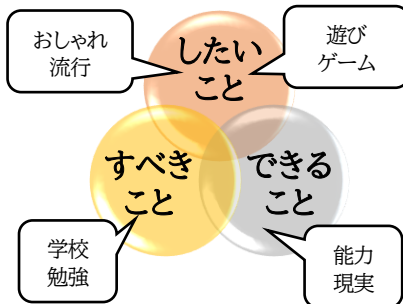
ある新聞記事で、「青春」についての記事が掲載されていたので、その記事のもとになっている本に触れてみました。その中で、「青春は、陳腐さと特別さが混ざり合った規範」という表現が気になりました。



「青春」を中学校時代に読み替えると、義務教育は誰もが経験するという点で、「誰にでも与えられている、陳腐(=ありきたり、つまらない)なもの」だといえます。その一方で、「それは10代前半の限られた時期であって、失われたら戻らないという点では、特別な意味を持つ」と理解しました。誰でも自分の姿を投影することができ、かつ、時間が過ぎれば失われるというかけがえのなさがあるために、多くの人にとって何かしら心を掻き立てられる

ものなのかもしれません。特に進学率が急上昇するに伴って、誰にとっても「学校生活があたりまえの日常」となればなるほど、理想とのギャップを感じ、自分に対してコンプレックスを抱きやすい状況になっているのではないかと感じます。

中学校時代は、「したいこと」「できること」「すべきこと」の3つがコントロールしにくく、アンバランスな状態で重なったり、離れたりしている時期です。思春期真っ只中の中学生にとって、これほどコントロールが難しく、激しく揺れ動く時期はありません。特に、「したいこと」と「すべきこと」の距離が離れれば離れるほど、理想の自分から遠ざかっていきます。では、なぜ3つの距離が離れてしまうのでしょうか？



- ①「したいこと(欲求・理想)」の急膨張：自我が芽生え、周りの世界が広がることで「こうやりたい」「あれをやってみたい」というエネルギーが爆発します。しかし、それはまだ地に足のついたものではないことも多いです。
- ②「すべきこと(義務・社会的役割)」の急増：定期テスト、受験や進路の決定、学級や部活動の組織の責任、人間関係のルールなど、急に「大人としての振る舞い」や「成果」を求められるようになります。
- ③「できること(能力・現実)」のギャップ：頭では分かっているが、心や体、社会経験等が追いつかない状態です。この「理想と現実のギャップ」が、本人の中に強い葛藤を生み出します。

①と②の距離が離れる(=やりたいことと、やらなければならないことが真逆にある)状態は、中学生にとって大きな苦痛で、エネルギーと時間をロスします。この距離が離れすぎると、「すべきことをやっている

時の強烈な義務感・やらされ感」と、「したいことをやっている時の罪悪感」の板挟みになります。結果として、どちらの効率も落ち、自己肯定感が下がって、結果的に「理想の自分」から遠ざかってしまうでしょう。

本当の理想の自分(なり得る最高の自分)に近づくためには、①②③の3つを少しずつ近づけ、重ねていくこと(=コントロールできるようになること)が、大切です。これこそが、中学校生活における精神的な成長そのものです。 **ヒント①「すべきこと」のなかに「したいこと」の要素を見つける ②「できること」を増やして、自信を育てる**

中学校時代は、この3つの輪が激しくぶつかり合い、バラバラになるからこそ、自分だけの「ちょうどいい重なり(アイデンティティ)」を見つけるための貴重なトレーニング期間なのかもしれません。

### 【例えばこんな状態】

したいこと: SNS を使っていたい、好きなことだけしたい  
すべきこと: 勉強をする、時間にあわせて行動する